

イエスは、たとえ話のなかで、父親から仕事を頼まれて、「承知しました」と言いながら実行しなかった弟と、「いやです」と言いながらも後で考え直して実行した兄と、どちらが父親の望み通りにしたかと問いました。答えは自ずと「兄の方です」となりますが、ここでイエスが強調しているのは、「後で考え直す」ことのできた兄の姿勢でした。しかし、人が「考え直す」ことは簡単ではありません。それを妨げているものがあるからです。

このたとえ話を聞いていた祭司長や長老達は、ユダヤ民族のなかでも由緒ある家系に属し、歴史的・社会的に権威を持った人達でした。彼らは、イエスが神殿の中で自由に行動したり教えたりしていたことに対して、「何の権威でこのようなことをしているのか」と問い正しました。また、イエスの先駆者である洗礼者ヨハネの権威を認めず、その一方で、ヨハネを預言者と信じていた群衆の機嫌を損ねないように上手く立ち振る舞う姿も見られます。そこで彼らが恐れているのは、自分達の権威（面目）が失われてしまうことでした。ところで、ここでの「権威」という言葉には、ギリシャ語で「外に立つ」という意味合いがあります。外に立って、周囲の様子を見ながら、物事を冷静に判断する立場を「権威」と捉えています。とすると、母親、父親、子ども、上司、部下…すべての人に、それぞれの立場から物事を冷静に見つめる目、権威が与えられていると言えます。しかし、そこで問題なのは、自分だけが権威を得ていると思ってしまうことです。人は、社会や家族、友人の間で、その人の上に立つ権威者でありたいと思うものです。自分の言うことを聞いて貰えないと、ムツとします。知恵や経験を蓄えるほど、自分を譲ることが難しくなるかもしれません。当然です。汗水垂らして、時に涙して、自分が必死に築き上げてきた今があり、権威があるのですから。それを無理矢理手放す必要もないのです。ですが、その権威にしがみつき、それを失うことを恐れるあまりに、「考え直す」という謙虚さが失われている私達の姿を主イエスは見つめておられるのではないのでしょうか。

ある神学者は言いました。「信仰に生きている人間は、面目を失う自由を持っている、そこで面目を失うということがあっても自由でいられる」。私達の罪のために周囲から侮辱され、十字架の死に至るまで面目を失い続けて下さったイエス・キリスト…この方にこそ権威があると信じるからこそ、キリスト者は、たとえ自分の権威（面目）を失っても、「後で考え直して」、主イエスの道を歩み直すことのできる自由が与えられているのです。

(文責：望月達朗牧師)

